



時代が助産師に微笑んだ!

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡県母性衛生学会 公開日: 2022-12-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高林, 香代子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/00004246

時代が助産師に微笑んだ！

聖隷三方原病院院内助産所課長

高林香代子

2009年3月に院内助産所「たんぽぽ」（以下、「たんぽぽ」）が開設し、2010年11月末に246件の分娩があり、産婦より多くの励ましの声をもらった。「たんぽぽ」と名付けた理由は可憐で優しく、強く、深く地に根ざし綿毛に乗って幸せの種子が広がってほしい、という願いからである。正常分娩を担うことができる私達助産師が、妊産婦及び地域の女性たちが出産育児等で困ることがないように、自分たちの力を提供したいと考え「たんぽぽ」は誕生した。今回は、準備からの開設に至る過程と紹介、医師との連携について述べたいと考えている。

立ち上げ迄の経緯として、当院では1980年代より母乳外来や産後の家庭訪問、電話訪問など県内の総合病院で先駆けて実施し、専門職として助産師自身の持っている知識技術を役立てたいという職場風土があり、背景に患者サービスの向上につながることは、積極的に支援する看護部、病院組織があったと考えている。産科部長の後押しもあり、助産師が中心となり正常分娩を担当するために、前段階として正常な妊娠経過の妊婦の妊婦健康診断（以下、健診とする）を行う助産外来を検討した。そのような中、社会では産婦人科医師の減少が叫ばれ、当院でも2007年2月に3名の産婦人科医の退職によって分娩件数が減少し同年3月に助産外来を立ち上げることとなった。1日9枠（1枠30分）の助産外来は健診全体の2割を担っている状況である。更に新たな展開として助産師の専門性を発揮させていくために、総合病院だからこそ提供できる安全、そしてそこから生まれる信頼感を得ていくために、医療援助の効果的利用を産科部長が提案してくださり、看護部長そして病院長の理解により、2009年3月1日、助産所「たんぽぽ」が総合病院内に誕生した。

現在この4名が専任として宅直制をとり、分娩時2名で対応している。8月からは4年目になる助産師の育成を図り、たんぽぽ研修をしており3年計画で人材育成を図っている。医師と助産師では分娩管理に関する思考・技術も異なるが、産科部長が一番に強調していたのは産科学を持つ医師と助産学からの助産師とが双方共通言語をもち、互いにそれを理解しあうことが大切、たんぽぽではそれが実践できていると話されている。温かい理解を示してくださる医師と助産師は互いに信頼関係をもち、助産師で行える所は助産師が担当して行くのである。産科医と助産師は一致協力してこの難局を乗り越えなければならないと産科部長は考え、以下の7点を話されている。①お互いの能力を認め合いながら、足りないところ同士を補充し、優れたところを前面に押し出し、また産科医療者全体として協力し合いながら妊産婦さんと胎児・新生児に安全・安心安楽に生まれてきてくれる様にマネジメントする。②ローリスクの妊婦さんやローリスクの産婦さんに対する妊婦健診・分娩には、医師も助産師さんと同じように助産医（師）という立場で、指導・介助を中心に予防、援助、見守りに参加することが出来る。③当院では「助産師外来」ではなく「助産外来」を名称としているが、ここはこだわりで「助産師外来」とすると助産師独占場となり、チーム医療や、医師と協力して妊産婦をケアしていくというニュアンスが不足する。④お互いの特技・能力を共有しておくことも大切であり、助産師は、お母さん気質・癒し系・根回し上手・姉御肌・アロマ・足浴、マッサージ・つぼ押し・乳房管理・会陰保護等とし、医師；外回転術・回旋異常用指矯正・陰部神経ブロック・傍頸管ブロック・鉗子分娩・骨盤位娩出術・帝王切開等

が提供できる⑤それぞれの持ち場で、自分の持ち駒を使って正常妊娠・ローリスク妊娠に軌道修正する、という作業が毎回の妊婦健診でありお産への支援である。⑥異常な病態になる前に、指導・介入し、異常を予防するという作業の繰り返しである。⑦肥満、高血圧、糖尿病、などの生活習慣病や切迫早産、骨盤位、回旋異常を予防修正する。危険と表裏一体のお産に必要なのはとにかく安全である。その安全の上に利用者、助産師の満足感やりがい感存在することから医師と強い連携をもって自分たちの力を発揮させていきたいと考えている。

安全の保証につなげているのが胎児モニターセントラルシステムである。2009年7月下旬にたんぽぽ、産科外来、病棟を含め設置され、全てのパソコンから状況が確認できるようになっている。たんぽぽにおいては入院時、分娩時にモニターを装着し観察しているが、このシステムにより医師、病棟スタッフに監視されている、という大きな安心がある。安全の保証のもう一つには毎週医師と共に分娩の振り返りと対象者の検討会を開催している。医師からのアドバイスを受けたり、判断、対応の根拠や状況説明など報告しながら、的確な判断が逢った場合は賞賛、その判断を下した根拠は何なのか、改善点などをためらわずアドバイスしていく、結果オーライではなく、こうすべきではなかったか等、4人で細かく討議を繰り返している。週1回の医師と共に行う検討会は対象判定のみならずお産の振り返りも、厳しくやっており、奥歯に物が挟まった意見ではたんぽぽ自体が危険にさらされ危機感から、結果論であっても安全、自分たちの思考技術の向上のためにもあらゆる疑問、確認をし、次にいい方向につなげようとしてる。たんぽぽのいいところは4人がそれぞれの持ち味を出して、マイナスがあればプラスで補いプラス過剰があれば冷静に慎重要素を放出するいいバランスが取れているところだと思っている。たんぽぽスタッフの24時間体制を望む声があったが、3年後には育成を図り実現させていきたいと考えて現在教育計画に基づいて研修を開始している。専任スタッフの増加によりスタッフ間のコミュニケーションや対象者把握不足を来さないように注意が必要となり、利用者の急激な増加もハイリスク化を見逃したり、紛れ混みを阻止できなかつたりすることもあつてはならないため、そのバランスも必要となってくる。

たんぽぽで出産された方たちには、たんぽぽノートや感想ファイルを記載していただいております、それには温かい言葉であふれている。このノートには「お産は大変だったけど楽しかった、辛い痛いイメージがあったので怖かったけどとてもいい思い出になるお産ができた、達成感を味わえることができた、夫や家族との絆が深まったような気がする」などと記され、たんぽぽ設立の思いであった「怖い辛い大変なお産のイメージを払拭し、人生で数回しか味わえないお産をいい思い出にしたい、上の子のメンタルにも配慮しながら家族の絆を深めたいということが一步一步構築されているような気がしている。たんぽぽが大事にしているのは家族の絆を大切に、ということとお産して良かったと感じていただくことが願いなのである。助産師の判断、アセスメント一つで分娩進行を調整できる醍醐味を感じながら、また産婦や家族のやる気を引き出し、肯定的に前向きになるよう支援していくことが助産師のやりがいにつながっているのである。

現在、全国に先駆けて愛知県新城市との院内助産所たんぽぽでのオープンシステムを構築中である。助産所のオープンシステムは先駆的であり、地域周産期医療の貢献への展望を持っている。今後も安全と安心、安楽を広く提供できるように関連施設が一丸となって地域助産システムを確立していきたいと考えている。